

日本語版への序文

『地球環境の政治経済学（原題：Paths to a Green World）』の日本語版をお届けできることは喜びにたえない。これは、極めて野心的な本である。本書は、地球環境のポリティカルエコノミーを専門に扱う初めてのもので、国際的な政策という「現実の世界」と、理論という「学問の世界」の中での論争を統合しようと努めている。本書は、国際会議場での、路上の反グローバル化運動での、そして、国際機関やNGO、さらに産業団体の会議室の中での、政治、経済、及び環境に関する見解を捉えようとする点において、国際条約や国際制度に焦点を当てる従来の研究を凌駕している。その過程において、本書はグローバル化、環境保護主義、経済成長、貧困、消費、貿易、企業による投資、及び国際金融を巡る論争を、経済的、政治的、生態学的、及び社会的な、様々な角度から吟味している。

本書は、地球環境の健全性にどのように政治と経済が関係するかについて、特定の見解を主張するものではない。そうではなく、本書は、様々な論争を分類するために、世界観に関する独自の類型を示すものである。この類型は、読者が重要な論旨を理解しやすいように、かなり単純化しているが、活発な論争を喚起できるほどに類型の違いを十分示していると我々は思っている。本書は又、地球環境の変化に関する文献での非常に重要な間隙を塞ぐものであると考えている。本書は、地球環境についてのポリティカルエコノミーを包括的に扱うことにより、地球環境政治の領域における昨今の需要に応えるものである。本書で我々が提案する類型は又、遥かに大きい需要——すなわち、学者、官僚、企業家、活動家が共通の言葉を使うことで対話を容易にすること——を満たすだろうと願っている。この後者の目標は、多分あまりにも野心的で、無謀でさえあるかもしれない。しかしながら、そのような対話を容易にしようと奮闘することは、不遜であることは重々承知の上ではあるが、学問分野の境界を横切

る我々の能力に関し、傲慢とも思われるようなリスクに見合うものである。

我々は、学術的専門用語を使うことなく、地球環境の変化に関するポリティカルエコノミーの複雑な様相を説明するのに最善の努力を払ってきた。勿論、本書は学術用語を使っている。そうしなければ、中核をなす論争の表面を撫でるだけになってしまうからである。しかし、事あるごとに、我々は学問分野を越えるような方法で論争を説明し、用語を定義づけるように努めた。様々な教育的背景——開発研究、経済学、環境学、地理学、人間生態学、国際法、哲学、政治学、及び社会学を含めて——を持つ人たちが、中核的な論争の鳥瞰図を理解するために、本書が役に立つことを我々は願っている。

『地球環境の政治経済学』は又、ポリティカルエコノミーと地球環境変化との共通領域に関する論争を紹介する大学の教科書としても十分役立つだろう。本書を教科書として使う指導教員は、個々の地球環境問題の事例研究を付け加えていただいてもよい。我々が教える際には、例えば、気候変動、森林減少、食糧安全保障、再生不可能な資源の抽出、オゾン減少、残留性有機汚染物質、有害廃棄物貿易などのポリティカルエコノミーに関する講義や文献講読を付け加えている。しかし、それ以外の地球環境問題——酸性雨、生物多様性の喪失、砂漠化、エネルギー利用、魚の乱獲、遺伝子組換え作物、絶滅危惧種の貿易、越境汚染、捕鯨、その他諸々——も同様に役立つだろう。

指導教員は又、自分たちの学問分野で地球環境変化のポリティカルエコノミーを分析するために使う特定の専門用語と研究方法を学生に教えるために、ある学問分野にさらに焦点を当てて文献を統合したいと思われることもあるだろう。例えば、我々2人のうち1人は政治学部で教えているが、国際関係論と地球環境政治の領域における用語と論争に触れている文献を使って、本書を補っている。もう1人は、環境学部と国際開発学部の両方で教えているが、それぞれの教育課程で学生が学ぶ内容を反映している文献を使って本書を補足している。学生に学問分野を超えて考えるように励ますことは大切であると我々は考えている。しかしながら、1つないし2つの学問領域に、ある程度学習したことをはめ込むのも重要だということもよくある。というのも、そうすることで、ある特定の学術分野における核心的な問題をもっと学術的な分析にかけること

ができるからである。

本書を続けて読まれる読者は——本書を読み始めた理由の如何を問わず——真摯な学究の好奇心を抱いてこの日本語版を読まれれば、やがて、様々な世界観の1つ1つが、本書がこれから進める分析の中で、等しく生気を帯びてくるものと我々は確信する。

2008年3月

ジェニファー・クラップ
ピーター・ドーヴァーニュ